

生命の再出発を導き、一生を見守る 肝移植の真髓を伝えたい



金沢大学医薬保健研究域
医学系肝胆臓・移植外科学/小児外科学
金沢大学附属病院 肝胆臓・移植外科 特任助教
がぼな りょうすけ
蒲田 亮介氏

2011年 金沢大学医学部医学科卒業
2017年 珠洲市総合病院 外科
2018年 金沢大学附属病院 肝胆臓・移植外科 医員
2020年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科卒業
2021年 金沢大学附属病院 肝胆臓・移植外科 特任助教
専門領域 肝胆臓外科・肝臓移植

北陸における肝移植を牽引する金沢大学附属病院臓器移植センター。センター長であり、分野の最前線に立つ八木真太郎教授チームの一員、蒲田亮介先生は将来を嘱望される外科医です。肝不全により生死の境にあった人へ新たな人生を贈る移植医療の素晴らしさに魅せられた蒲田先生をご紹介します。

Best Human ISHIKAWA
ベストヒューマン
石川
ドクター編 57

ダイナミックな手術に 感銘、肝移植の道へ

私は肝胆臓外科、肝移植を専門としています。肝臓、胆道、膵臓は、内臓の奥に位置し、大きな血管が周辺を走っているなど、解剖学的大変複雑な臓器です。その複雑さから、手術の多くは長時間を要します。また、人によって血管の位置や本数、臓器の位置や硬さが異なっているため、同じ手術といっても術式や難易度はさまざまです。

こうした背景から肝胆臓の手術では術前の準備が重要で、画像診断、臓器機能の評価、血管や尿管解剖の把握、手術時のシミュレーションなどが不可欠です。さらに、術前準備を徹底しても、術中に起こる不測の事態に対し、どうリカバリーするか、術後の合併症にいかに対応するか、というように、術前、術中、術後、退院後のフォローまで、的確な対応が求められる肝胆臓外科は、大変やりがいがあります。

私がこの分野を選んだ最大の理由は、肝移植にあります。学生時代の病院実習で、ひとりの患者さんを救うため大勢の医師が十数時間の手術に挑む姿を目の当たりにし、強く心を打たれました。

肝胆臓外科に進み、後期研修医の時期には「SNUC-LT Program」という有意なプロジェクトに参加させていただきました。熊本、岡山、長崎、新潟、千葉、本学、6つの国立大学の連携と、京都大学と国立成育医療研究センターの協力により肝移植を担う人材を養成する国内初の事業です。

スキルを高める機会、 貴重な出会いに感謝！

このプログラムの特長は実習に重点を置いていることで、代替動物を用いて肝移植の訓練をしたり実際の肝移植手術の助手を務めたりして3年間、技術を磨きました。国内の肝移植件数は年間400例ほどなので、このような鍛錬が若手にとつていかに貴重であるか、察していただけるのではないのでしょうか。分野の第一人者である先生方にご指導を仰ぎ、得られた知識もかけがえない資産です。

同年代のライバルたちとの交流も始まり、私を送り出してくださった太田哲生教授には感謝の一言、当時京都大学におられた八木先生との出会い：本当に素晴らしい繋がりをいただきました。

もう一つ、心に残る出来事は、第27回日本門脈圧亢進症学会のビデオオリンピック

ク2020で銀メダルをいただいたことです。門脈圧亢進症は、肝硬変などで門脈からの血流が滞り、肝臓に入るべき血液が食道や胃への細い血管に迂回し、食道静脈瘤など様々な症状を来す病態です。その患者さんは術中出血しやすく、手術は高難度とされています。門脈圧亢進症の手術に対する金沢大学独自の工夫について、私は北陸地区の代表として発表しました。本学では外科、消化器内科、放射線科によるチーム治療を行っていて、この受賞は、チーム金沢大学が評価されたことにはほかなりません。

また、珠洲市総合病院での勤務も良い勉強になりました。地域住民のみならずと親しく関わられたこと、上司やスタッフとおつきあいなど、大病院では経験できないことを学びました。

移植手術の外科医を 一人でも多く！

私が医師を志したのは、幼少時から医師である母方の祖父や父の姿を見てきたことが影響していると思います。小学校の卒業アルバムに「将来の夢は外科医」と書いていたことには、覚えがなく、わがことながら驚いています。

外科医になり、肝移植の大手術も術後



蒲田先生は肝移植において、レシピエントに入った健康な肝臓の動脈を吻合する場面を担当

合併症も乗り越えた患者さんを見ると、この分野に進んで良かったと心底思います。一方で、術後に再発したり、合併症に苦しんだりする方もおられ、そのフォローも大切。外科医は、患者さんとそのご家族の人生に深く関わる存在といえます。

また、移植手術は、ドナーの肝臓部分摘出、レシピエントの肝臓全摘出、新たな肝臓移植、血管や尿管の吻合など十数時間、複数の外科医が力を合わせる究極のチーム医療です。そんなチームのメンバーが増えてほしいと思っています。若輩の私がかちらに出させてあげたいのも、この分野の魅力を伝えることで、肝胆臓外科、移植外科を目指すドクターが増えてほしい、その一心からなのです。